講演

記者と原子力*

(福井新聞社 論説委員長) 橋 詰 武 宏

平成10年9月、福井で初めての日本原子力学会の大会が開かれました。地元マスコミ界から私が招待され講演する機会を得ました。約30年間にわたる新聞記者生活を振り返ってみますと、知らず知らずのうちに原子力と実に長い付き合いを重ねてきました。

福井から情報を発する中で、最も多く、価値も高い情報、ニュースは原子力に関することでした。福井新聞の記者は少なからず原子力を担当しています。私は県政記者を長く務めた経験から原子力にかかわることが多く、原子力がテーマの一つになっています。

大会では「記者と原子力」の演題で、原子力と付き合いしてきた歳月を振り返りながら講演させていただきました。

光 と 影

平成10年夏、地元の壮年グループと敦賀半島の突端にある日本原子力発電敦賀発電所を見学しました。仲間たちの本当の目的は若狭地方の民宿でうまい魚料理を食べることにありましたが、道中の敦賀発電所に立ち寄ったものです。ここへはよく取材に来たもんだなあと思ひ出しました。

マイクロバスから眺める敦賀湾。気比の松原、敦賀港、フェリーなど大型船の出入り、小さな漁港には漁船、釣り船が揺れる。民宿が点在し、幾つもの海水浴場が連なる。いっもと変わらない風景が広がっていました。

何回来てでもいい所です。自然、歴史、産業が敦賀湾に映り、溶け込んでいるようでした。地域生活の多くの部分を敦賀湾にゆだねていることが風景によく表れています。

敦賀市内からバスに揺られて20分ぐらい。浦底湾が見えてきました。大きな敦賀湾の奥まった所にある湾です。浦底湾にはあのホンダワラが健在であろうか。ふと思ひ出しました。

ヨオっ、頑張っているか、と声をかけなくなる衝動にかけられました。浦底湾の底には海の環境状態を教えてくれる海藻ホンダワラがいます。今も環境状態を体内に刻んでいることだろうと、けなげな頑張りを頼もしく感じました。

浦底湾のホンダワラを知ったのは1981(昭和56)年4月。

The Atomic Energy Seen from the Journalist: Takehiro HASHIZUME.

* 本稿は、1998年9月28日、日本原子力学会「1998年秋の大会」(福井工業大学)で行われた招待講演の草稿に補筆したものである。

(1998年 11月30日 受理)

私は当時、県政記者を務めていました。日本原電敦賀発電所の廃棄物処理建屋内から放射能を含んだ廃液が流れ出す事故が発覚しました。廃液がコンクリート床の割れ目などからしみ込み一般排水路を伝って海に流れ出したのでは、と大騒ぎになったのです。

排水路の土砂から1g当たり10,000pCiの高濃度放射能が検出されました。原子力発電所サイト外の浦底湾にも流れ出したのではと疑いが出てきました。だとすると、魚介類への影響が避けられない状況が生まれます。

証拠をつかんだのがホンダワラでした。県が調べたところホンダワラが放射能を体内に含んでいたのです。日本原電は当初、事故を隠していたのですが、動かぬ証拠をホンダワラが握っていました。

「ホンダワラは知っていた」。当時の新聞の見出しで、最高のフレーズだったのでは、と思っています。事故や失敗をやらかしますと、どうしても隠したい、騒ぎを起こしたくない、小さくさせたい、という心情が働きます。

ホンダワラはそれを厳しくとがめました。ホンダワラの方が正直で、科学的だったのです。人(組織)の説明をくつがえし、事実を正しく見据えたホンダワラ。ホンダワラを調べて証拠を挙げた県の調査姿勢に感心したものです。

これは日本の原子力発電所で高濃度の放射能が外部に出た最初の事故でした。事故の取材で発電所や浦底湾を訪ねてから17年が経過いたしました。今もはっきり記憶にとどめています。

この事故は「原子力の影」の部分です。影のところから書きましたが、敦賀発電所こそ開発当時、「光」として華々しくスポットが当たったものでした。

福井県で原子炉が運転されたのは1970(昭和45)年。この年日本で最初の軽水炉型の原子力発電所2基が稼働しました。3月に日本原電敦賀1号。もう1基は関西電力美浜1号で、その年の11月に運転しました。

敦賀1号は沸騰水型、美浜1号は加圧水型。タイプが異なる原子炉2基の運転が始まり、本県の原子力開発のパイロット役になりました。敦賀1号、美浜1号とも、ちょうどその年開幕した大阪万国博覧会の会場に「原子の灯」を送った原子炉だったのです。

原子力発電所から万博への送電は、平和の灯としてマスコミに大々的に取り上げられました。万博会場へ取材に行っていた私は、郷里から送られる平和の灯を誇らしく感じたものです。万博で福井が紹介された中で最大のもの

が、原子力の灯だったように思います。未来を開く光。原子力はそんなイメージでスタートを切りました。

日本原電敦賀発電所を見学しながら、記者として原子力との関わりはこの発電所から始まったことを改めて振り返りました。原子力の「光と影」。あざなえる縄のように原子力の「光と影」はその後の歴史を刻んでいます。何回か足を運んだ発電所でしたが、感慨深く見学しました。

15 基

福井県は北陸地方の西端に位置しています。近畿、中京圏とも近く、地理的な条件に恵まれています。しかし、雪国などのハンディ、イメージの低さなどから太平洋側に比べ産業の発展は遅れました。人口83万人弱、少ない方から4番目の県です。国の人口、予算規模から約1%枠の県というのが一つの目安でしたが、最近は1%を切っています。

北陸自動車道が近畿、中京圏と直結したことや、雪害を克服できるなど社会基盤が整い、今は県勢発展に展望が開けてきました。経済企画庁が出す「豊かさ指標」では、本県は5年連続で総合1位になっています。データの取り方に異論が出ていますが、その他の機関が出す調査でも本県は上位にランクされるケースが多い。

地勢は敦賀と南越を隔てる山を境にして嶺北、嶺南に分かれ、広い平野を持つ嶺北地方に産業、農業、人口が集積している。嶺南地方2市6町村の人口は県全体の20%を割ります。かつては大陸文化の入口として嶺南地方の若狭は重要な所として栄えましたが、嶺北との経済格差は否めない。

嶺南を東西に貫く国道27号。東の敦賀市から西の高浜町の端まで72.5km。この間の地域に15基の原子力発電所が集中しています。若狭湾はリアス式の海岸で複雑多様に入り組んでいるので海岸線は長いけれど、嶺南の狭い地域に原子力発電所が過度に集中していることは事実です。世界で例がない集中立地といえるでしょう。

「原発銀座」といわれるゆえんです。嶺南地方の開発、振

興と原子力の立地は密接にかかわっています。それが本県の原子力立地の歴史です。さらに各種の原子力発電所があるから「原発の百貨店」という見方もできます。加圧水型軽水炉(関西電力の原子炉、日本原電敦賀2号)、沸騰水型軽水炉(同敦賀1号)、新型転換炉(ふげん)、高速増殖炉(もんじゅ)といった具合。

日本の産業振興に電力を生産する基地であるとともに、日本の原子力研究の役割も果たしてきました。動燃の「ふげん」や「もんじゅ」がそれに当たると思います。「ふげん」は歴史的役割を終えたという判断が出ているし、「もんじゅ」は不幸にして1995年12月にナトリウム漏出事故を起こし運転が停止されたままです。再開のめどは立っていません。

日本の核燃料サイクル計画を狂わせ、根本的に見直さなければならなかった大きな事故になりました。政府は動燃事業団を改組し、核燃料サイクル開発機構にして出直すことにしました。

使用済み核燃料からプルトニウムを取り出し、ウランに混ぜ、混合酸化物燃料にして使うプルサーマル計画も緊急のテーマになっています。「もんじゅ」を含め15基の原子力を受け入れている本県は、安全性の確保と、原子力が真に地域の福祉向上、地域振興につながっていくことを強く求めています。

そのためにも国をあげた研究がぜひほしい。今回、本県で開かれた日本原子力学会の大会が意義深い会になり、住民の願いにかなう大きな成果につながるよう期待してやみません。

1967(昭和42)年春、福井新聞社に入社以来、約30年間、記者として原子力とは付かず離れず付き合い、見てきました。取材対象とは不即不離の立場が求められ、原子力ともそんな立場で向き合ってきたつもりです。

善きにつけ、悪しきにつけ、強い関心を原子力に持ち続けてきました。現在、コラムの執筆を担当しています。今後も記者として、県人の一人として原子力と向き合うつもりです。